
時空を越えた超戦士～序章～

かのもの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時空を越えた超戦士（序章）

【NZコード】

N4364X

【作者名】

かのもの

【あらすじ】

ドラゴンボールの世界には分岐した未来が複数存在する。

これは、その中の一つ人造人間たちによつて地獄と化した未来。

ここから、新たなる未来が分岐する。

人造人間を倒すために修行を続ける孫悟飯に齋された人造人間に対抗する手段。

それを手に入れるべくドクターゲロの研究所に向かう悟飯に、思いがけない運命が待ち構えていた。

これは、ドラゴンボールZと魔法少女リリカルなのは Strike RSのクロスオーバー作品の前日談ですが、この作品自体はドラゴンボールZのみの二次小説作品です。

孫悟空とその仲間達が駆け巡った世界。
便宜上『ドラゴンワールド』と呼称しよう。

この世界の未来が分岐し、幾つもの並行世界が生まれていることは
読者諸兄もご存知だろう。

第一の未来は、全てのZ戦士達が死に絶える世界。

宇宙の帝王フリーザとの戦いの後、悟空が心臓病で亡くなり、その
半年後、ドクターゲロの造つた人造人間17号、18号により、こ
の世が地獄と化す世界。

人造人間は生みの親であるドクターゲロを殺し、その驚異的な力を
持つて人間たちを次々と虐殺していった。

破壊活動を続ける彼らを倒すべくZ戦士達が立ち上がつたが、その
圧倒的な強さの前に次々と殺されていった。

その14年後に生き残っていた孫悟飯が殺され、戦士はベジータと
ブルマの息子トランクスのみとなってしまう。

彼は一度、母であるブルマが作ったタイムマシンで過去に行き、未
来の危機を悟空たちに伝えるが、自分の時代に戻り、人造人間の弱
点を見つけ何とか倒す事に成功する。

だが、人造人間の弱点を伝えに再び過去に向かおうとするトランク
スの前に現れた人造人間セル。

彼は17号、18号を吸収することで完全体へと進化する筈が、ト
ランクスによつて2人が倒された為に過去に戻り完全体に至らうと
トランクスを殺し、タイムマシンを奪つて過去へと向かつていった。

第一の未来は、我々が良く知る『正史』。

フリーザ親子が地球上に襲した時、未来からやつてきたトランクス
が本来、悟空が倒す筈だったフリーザ親子を倒した事と、第一の未

来からやつて来たセルによつて変わつた未来。

完全体となつたセルが『セルゲーム』開催し、超サイヤ人を超えた超サイヤ人『超サイヤ人2』孫悟飯がセルを倒し、平和になつた未来。

その後、魔人ブウ、ベビー、スーパー17号と数々の強敵が現れるが、孫悟空の手によつて倒された。

そしてドラゴンボールの使いすぎによつて溜まつたマイナスエネルギーから生まれた邪悪龍との戦い。

最強最悪の敵、一星龍イシンロンとの戦いの後、孫悟空は神龍ジーンロンと一つとなり、死を超越した存在となり、姿を消した。

第三の未来は、『正史』から戻つてきたトランクスが平和を勝ち取る世界。

トランクスが第二の未来から自分の時代に戻り、人造人間17号、18号を圧倒的な強さで倒し、更にその3年後タイムマシンを奪いに来たセルを倒し、第一の未来とは別の結末を迎える。

これらに共通するのは、トランクスがタイムマシンで過去に赴いたことによつて分岐した未来である。

しかし、トランクスというファクターに関係なく分岐した未来が存在する。

これは、第一の未来から分岐した誰も知らない第四の未来のお話である。

物語は、ピッコロ達が殺されてから半年後から始まる。

エイジ767年。

「じ…人造人間だ…！人造人間が現れたぞ…！」

オレンジスター・シティに現れた一人の悪魔、人造人間17号と18号。

「ハハハハッ！さあ、逃げろ！早く逃げないと殺しちゃうぞ！！」

「逃げられるわけないけどね…」

人造人間たちは指先からエネルギー波を放ち、逃げ惑う人々を狙い撃っていた。

「そこまでだ！人造人間！！」

「うん！？」

「何だお前！？」

「格闘技世界チャンピオンのミスター・サタンだ！お前たちの悪行もこれまでだ…今まで事前に爆弾を仕込んだトリックを使っていた様だが、この私には通じんぞ…！」

「おーーーサタンだ！」

「ミスター・サタン！あんな奴等、早くやつづけてくれ！」

「サーダーン！サーダーン…！」

オレンジスター・シティが誇る世界チャンピオン…彼らの英雄であるミスター・サタンの登場に、住民たちはサタンコールを上げた。

「いぐぞ！ダイナマイトキッパーーク！！」

サタンのキックが17号の顔面にヒットし、そのままパンチやキックを猛ラッシュで打ち込むが17号は微動だにしなかった。

「…………ぐだらん。お前はもう死ねよ！」

17号は事も無げにそう言いつと、ミスター・サタンの胸に手刀を突き入れた。

「ウギヤツーそ……そんな……」

サタンは胸部を貫かれ、そのまま息絶えた。

「…………！」

自分たちの英雄があつさりと倒されたことに呆然となる住人たち……。

やがて、脳が事態を認識し恐慌に陥った。

「サ……サタンが……！」

「サタンが殺られた……！」

「た……たすけてくれ……！」

逃げ惑う人々を再び襲う人造人間たち……。

オレンジスター・シティは破壊されつくし、一人の少女を除き死に絶えた。

「パパ」

その少女はミスター・サタンの亡骸の傍らに蹲っていた。

少女の悲痛な叫びが、廃墟と化したオレンジスター・シティに響き渡つた。

乙戦士唯一の生き残りである孫悟飯は母・チチの制止を振り切り、かつてピッコロと一緒に修行し、ベジータ達サイヤ人と戦った地で、

ピッコロやクリリンといった親しい者たちが殺され、悟飯はその怒りで父・悟空と同じ超サイヤ人に覚醒していた。

しかし同じく超サイヤ人は賞讃してしまったヘシータも人造人間たちには敵わなかつた。

悟飯も今のおままで勝てない事は理解していた。

聞いても、まだ手を出せなかつた。

ベジータの息子のトランクスはまだ幼す。

「お父さん……。お父さんわれ生きていたが、……」

どんなにとんでもないことが起こっても、父・悟^{ハル}さえ生きていれば、絶対に何とかしてくれるの……。

今の悟飯には、悟空の代わりは出来なかつた。

そんな自分に対する怒りと悔しさを鎮め、修行に打ち込んでいた。

幾日か過ぎたある日、悟飯が修行をしていくと近くにジェットフライヤーが墜落して來た。

「な……何だ！？」

悟飯は訝しみながら、墜落現場に向かつた。

「…………」

ジェットフライヤーに乗つっていた老人は、なんとか生きていたが既に時間の問題だつた。

どうやら、怪我だけではなく、病んでいる様だつた。

「おじいさん……しつかりしてください……」

「ど……何方か……存ぜぬが……頼みを聞い……てくだされ……。この地図には……人造人間たちを造つたドクターゲロと言つ……男の研究所の位置が……記されています……。きっと……そこには、人造人間たちのデータが……残されて……いる筈……それを、何処かの有能な……科学者に……見せれば……きっと……人造……人間達の弱点が解……る筈……どうか……ワシに代わつて……それ……を……」

老人は悟飯に地図を託すとそのまま息を引き取つた。

「……ドクターゲロの研究所！？」

悟飯は、老人の言葉を噛み締めていた。
何故、気付かなかつたのか？

奴等の力は科学の力で生み出された物……ならば、人造人間のデータを有能な科学者に見せれば…幸い、悟飯には有能な科学者という人物に心当たりがある所ではなかつた。

「人造人間のデータをブルマさんに見せれば、きっと人造人間の弱点が解る！みんなの仇を討てる！！」

悟飯は、地図に記されたドクターゲロの研究所に向かうため、飛び立つた。

この老人との出会いが、第四の未来へとつながるファクターだつた。

前編（後書き）

ドラゴンボールとののはのクロス作品は結構用意します。自分でも書きたくなつたので、とりあえず今回までは予告編。大体、3話くらいです。

あらすじでも書きましたが、この話自体はドラゴンボールのみです。その後、時空を越えた黄金の騎士終了後、本編を書く予定です。

では、これからも私の作品にお付き合ってください。

到着した悟飯が見たのは、既に破壊された研究所だった。

「……くそ！人造人間たちはドクターゲロを殺した後に、研究所も破壊していたのか？」

しかし、それでもせつかく来たのだから、何か役に立つものがないか探すこととした。

瓦礫を退かしていくと、地下室への入口を見つけた。

「……そうか…。人造人間達は地下室の存在を知らなかつたのか」

考えてみれば、人造人間達の元は、ドクターゲロとは何の縁もない、何処にでもいそうな不良の少年、少女である。

狂人的な科学者が、そんな輩に自分の研究所の全てを教える筈がなかつた。

地下室を降りた悟飯が目の当たりにしたのは、未だに稼動を続けるコンピューターと、培養カプセルにある不気味な幼虫のような姿をした胎児……であった。

培養液のカプセルの名札には『Cell』^{ネーミングプレート セル}と刻まれていた。

「……な…この氣は！？」

『セル』から感じる微かな氣は、父・悟空と師・ピッコロ……ベジータ、そして宇宙の帝王フリーザとその父・ゴルド大王の氣だった。そして、こここの設備はこの化け物を成長させる為のモノであること気付いた。

「……お父さん達の気を持つ化け物……もしこんな奴が成長したら……
人造人間たち以上の脅威となる」

悟飯の背に冷たい汗が流れていった。
そしてふと、デスクに目を向けると無造作に拡げられている紙を見つけた。

「…………これは…………間違いない。人造人間たちの設計図だ！」

これをブルマに見せれば人造人間たちの弱点が解る。

悟飯は設計図を丸め左手に持つと、再びコンピュータと『セル』の方に視線を向けた。

「…………悪いが、地球の為にもお前のような奴を見逃すわけには行かない！」

悟飯は右手を『セル』に向けると氣功波を放ち、培養力プセルの中の『セル』を塵一つ残さず消滅させた。

その後、コンピュータも完全に破壊し、研究所を後にした。
そして、ブルマの居る西の都に向かつて飛び立とうとした時……今、最も遭いたくない奴等と遭遇してしまった。

「…………確か、孫悟空の息子の孫悟飯…………だつたか？」

「へえ／＼。こいつ生きていたんだ……」

人造人間17号と18号だつた。

偶然か、それとも運命の悪戯か……たまたまこの近くを飛んで移動中だつた人造人間たちと鉢合わせをしてしまった。

「……こいつ何か持つてるよ

「……ここのあたりは確か……ドクターゲロの研究所のあつた……!?」

先ほどまで小馬鹿にした表情をしていた17号の顔が鋭い表情に変わった。

「貴様……それはゲロの研究所から持ち出したモノか?」

17号は、かつてドクターゲロが作った緊急停止コントローラーの存在を思い出した。

ドクターゲロは言う事を聞かない一人に対する予防策として、強制的に2人の活動を停止させるコントローラーを持っていた。

隙を突いてそれを破壊し、ドクターゲロを殺したとはいえ、自分たちの設計図さえあれば、他の科学者でも、作成可能な代物である。

「……どうやら、この場で確實にお前を殺さなければならなくなつたな……」

なし崩し的に戦闘が始まった。

悟飯は超サイヤ人に変身し戦つたが、実力差は覆しようがなかつた。更には、設計図を守りながらの戦いなのだから、尚更であった。超サイヤ人に目覚めたとはいえ、今の悟飯は悟空にもベジータにも追いついていない。

悟飯の攻撃はまったく通用せず、17号、18号の攻撃に為す術もなく、甚振られ続けた。

「あの頃よりは多少強くなつたようだけれど……まだまだね……」

嘲るよつて一〇〇mは呑いた。

「悪いが今回は確實にトドメを刺せむりうわも……」

風前の灯火となつた悟飯の命……その時だつた。

悟飯達から一〇〇mくらい離れた場所に宇宙からの落下物が降つて來た。

「何だあれは！？」

「…………あれは…………サイヤ人の…………フリー・ザ・軍の…………宇宙…ポッド…！」

一七号と一八号は悟飯の胸倉を掴みながら、宇宙ポッドに近づいていた。

ポッドの扉が開き、中から長身で上半身裸の物静かそうな優男が出てきた。

「なんだアイツ！？」

「宇宙人か！？ 地球に来るとほ」苦労な事だな……」

一七号たちの声に反応したのか、優男が視線を向けてきた。
そして一七号が掴んでいる悟飯の姿を見て、その静かそうな雰囲気が一変した。

「カカラツトオオオオオオオオオオ……」

男の髪が逆立ち金色に変化した。

「ス……超サイヤ人！？」

悟飯は、この男がサイヤ人である事を知り驚愕した。
ベジータの話では、純潔のサイヤ人は悟空とベジータ以外存在していないと聞かされていたからだ。
最も、実はターブルという名のサイヤ人でありながら戦闘に向かない性格のベジータの弟も生き残っていたのだが……。

その男は無造作に人造人間たちに気功弾を放つてきました。
とつさに躲した一人だが、予想を上回る威力に吹き飛ばされた。

「…せつかくの服が汚れたじゃないか！」

激昂した18号が、超サイヤ人に突撃していった。

「フン！」

「な…何ッ！？」

18号は、超サイヤ人の無造作に繰り出されたパンチを受け、胴体を真つ二つにされ爆発した。

その時、18号の懷から小さな宝石が零れ落ちた。

「ば…馬鹿な…18号がたつた一撃で…！？」

驚愕した17号は悟飯を放り投げ、超サイヤ人に向かつていった。
パンチとキックを猛ラッシュで超サイヤ人に繰り出すが、微動だにしなかつた。

「……そ……そんな馬鹿な……ぐあーー！」

17号は、超サイヤ人のパンチを受け吹っ飛んだ。

17号の心に今浮かんでいるのは恐怖であった。因果応報なのか、今まで相手を甚振る側だった17号は立場が反転し甚振られる側になっていた。

「ち……畜生……。俺は最強の人造人間……人間なんかにやられて溜まるかああああああああ！」

17号は最大規模のエネルギー波を超サイヤ人に向け放った。エネルギー波は直撃し、あたり一体を吹き飛ばした。

「どうだ……」

だが……砂埃が晴れて目にしたのは無傷の超サイヤ人の姿だった。

「ち……畜生……この化け物めーーー！」

17号はやけつぱちになり特攻した。

「……俺が化け物？……違う、俺は『悪魔』だ！」

超サイヤ人はそう呟くと、左手に気を溜めそれを突撃していく17号に投げつけた。

「う……うわあああああああああああ！」

直撃した17号は、爆碎した。

17号をあつさりと殺した超サイヤ人は倒れている悟飯に近付き、その顔を凝視した。

「……違う……カカロットじゃない……。カカロットは何処だああああああああ！」

超サイヤ人は悟飯を蹴り飛ばし、周辺の破壊を始めた。

「……奴は……お父さんを求め……て、この地球に来た……のか……」

悟飯は道着の帯に結んである袋を開き、中から仙豆を一粒取り出し、それを飲み込んだ。

体力と傷が一気に回復した悟飯は、破壊活動を続ける超サイヤ人を睨み付けた。

人造人間は倒された。

しかし、地球が平和になつたわけではない。

人造人間を倒した男はそれ以上の悪魔であり、地球人は滅亡の危機に晒されることとなつた。

皮肉にも、人造人間は殺戮を楽しんでいたので、地球人を全滅させたら楽しみが無くなるから、じわじわと地球人たちを殺していくが、超サイヤ人は一気に地球人を全滅させるだろう。

なぜなら地球を滅ぼしても、他の惑星で暴れられるからである。

「……ここで奴を倒さなければ、地球は終わりだ」

悟飯は決死の覚悟で、超サイヤ人に向かつていった。

仙豆により死の縁から蘇つたので、サイヤ人の特性により戦闘力が上がつたが、それでも人造人間に殺された当時のベジータ級になつたに過ぎない。

そのベジータをあつさりと殺した人造人間をこれまたあつさりと殺した超サイヤ人に敵う筈も無く、悟飯の攻撃を受けても先ほどの17号の時と同様、超サイヤ人は微動だにしなかつた。

「…邪魔だ！」

超サイヤ人は悟飯にパンチを食らわせ、回し蹴りを放ち、走りながら悟飯を蹴り上げ、最後に気功弾を撃ち込んだ。

「うわああああああああああああ！」

悟飯は再び半死半生と化して倒れ伏した。

「…………だ……駄目だ……力が……足りない…………」

悟飯は何度絶望を味わつただろう。

サイヤ人襲来時に、ピッコロがナッパの攻撃から自分を護り死んだ時。

ギニュー特戦隊のリクームに殺されかけた時。
フリー・ザにクリーリンが殺された時。

悟空が心臓病で亡くなつた時。

ピッコロや仲間達が人造人間に殺された時。
超サイヤ人に覚醒し、人造人間に挑んだが、手も足も出ず敗走した時。

そして、今、この時。

今まで、何度も絶望した。

特に悟空が死んで以来、力不足を嘆き、無力感を味わってきた。

「俺は……」のまま何も出来ず死んでいくのか

トドメを刺すべく倒れていた悟飯に近付いていく超サイヤ人は、歩

いて、いのちに先ほど18号の懐かし零れた宝石を踏み砕いた。その瞬間、地球が……否、次元そのモノが震動した。

「うわああああああああああああああ！」

超サイヤ人と悟飯は、次元震によつて発生した次元の裂け目に墮ちて行つた。

中篇（後書き）

突如現れた超サイヤ人。
まあ、プロリーなんですけど……。

さて、次回後編。

プロリーに対抗すべくあの男が悟飯の危機に駆けつけます。
その男の正体とは……！？
まあ、勘が良い人は誰だか解るでしょうが……。
では、これからも私の駄文にお付き合いください。

幕間（前書き）

予定を変更して、後編の前に幕間を入れます。

エイジ790年に起こった邪悪龍との戦いの後、孫悟空は神龍と共に次元空間の狭間にある『超越空間』で眠りについていた。

『超越空間』とは、超越者以外は余程の天文学的な確率でしか行くことが叶わぬ、正に全てを超越した場所である。

超一星龍を超ウルトラ元氣玉でマイナスエネルギーごと浄化した後、神龍と一つとなり界王神すら越えた超越者となつた悟空は、マイナスエネルギーの完全浄化の為、眠りについていたのだ。

悟空……悟空……田を覚ませ！

「…………ふああああああー何だよ神龍……もう一〇〇年くらい経つたのか？」

神龍に起じられた悟空は、欠伸をしながら訊ねた。

……違つて、何者かがこの空間に迷い込んだようだ……

その天文学的な奇跡が起こつたようであった。

「…………あれは……まさか……悟飯と……ブロリー！…？」

「…………どうやら、我々とは別の可能性の世界から、この空間に迷い込まれたようだぞ……

「…………確かに、まだ子供ん時の悟飯だ……」

悟空が最後に別れた時の悟飯の年齢は32歳。

この空間に跳ばされた悟飯はどう見ても10歳にも満たない子供である。

恐らく……お前が心臓病で死に、人造人間によつて地獄と化した世界から更に分岐した世界から何らかの力によつてこの空間に跳ばされたのだろう……ここは、あらゆる世界、あらゆる時代に繋がっている場所だからな……

意識がないのか、悟飯とブロリーはどんどんと流され、別世界への出口に流されていった。

……2人とも『異世界』に跳ばされてしまったぞ……

「いけねえ……悟飯は兎も角、ブロリーを野放しにしたら、別の世界の人間にすげえ迷惑がかかるぞ……」

悟空は、ブロリーの恐ろしさを骨身に染みて知つている。

行くのか？悟空……

「ああ。すまねえが例え別次元とはいえ、この目で見た以上、悟飯を見捨てる事はできねえし、ブロリーを放つておく訳にもいかねえな『願い』しか叶えられんぞ……」

まだ、マイナスエネルギーは完全に浄化出来ていない……。簡単な『願い』しか叶えられんぞ……

「とりあえず、オラを現界をせることは出来るんだろ？」

それくらいなら大してマイナスエネルギーは発生しない……

「……じゃあすまねえが、オーリを丼飯とフロコーが跳ばされた世界に現界させてくれー！」

【容易い事だ……】

神龍の目が光を発すると、悟空の姿が「『超越空間』から消え去了る。

幕間（後書き）

はい。次回こそ間違いなく後編です。
まじめに待ってください。

後編（前書き）

我ながら、相変わらずの滅茶苦茶な設定です。

ブロリーの台詞……ほとんど「カカロット」だけですね……。

とつあえず、後編をどうぞ。

「…………は？」

意識を失っていた悟飯が目を覚ました時、辺りの景色が変わった。

「…………一体……ここは何処なんだ……？」

あたり一面、先ほどまでいた場所ではなく、草一本生えていない不毛地帯のようだ。

「…………あの超サイヤ人は…………此方に向かって来ている…………けれど…………それ以外の人間の気が感じられない…………」

感じるのは先ほどまで戦っていた超サイヤ人と、人間とは違つ獣たちの気しか感じられなかつた。

「…………カカロツトオオオオオオオオオ！」

そして、今、目の前に超サイヤ人が迫つていた。

仙豆はまだ残つてゐるので、食べれば直ぐに体力は回復するだらう。

しかし、もはや悟飯に為す術はなかつた。
否、初めから為す術があつた訳ではない。
自分が歯が立たなかつた人造人間をあつさりと倒してしまつような相手に勝てる訳がなかつたのだから……。

周りの風景を見て、ここが地球ではないことは理解できた。
何故、いきなり地球以外の場所に来てしまつたのか、その理由はわ

からない。

しかし、地球が目の前の悪魔から救われたのは確かなのだろう……。
ならば……もう何の憂いもなかった。

死ぬのは怖くなかった。

死ねばあの世で父や師…そして仲間達と再会できる。
母と祖父を残して逝くのは忍びないが、大好きな皆に逢えるのは嬉
しかつた。

「…お父さん、ピッコロさん…クリリンさん、ヤムチャさん、天津飯さん、饺子さん…俺…いや、僕ももう直ぐそれらに逝きま
す……」

超サイヤ人は、右手に氣を溜めるとそれを悟飯に向かって投げつけ
た。

悟飯は目を瞑り、目前に迫る死を待つた。
しかしその時、何処からともなく飛んできた氣功弾が、超サイヤ人
の放った氣功弾を相殺した。

「…カ…カカロツト…」

「……お前の好きにはさせねえぞ…ブロリー…」

声に反応し、悟飯は目を開けた。
そして、その目に写つたのは…?

「……お…お父…さん…?」

「…大丈夫か…悟飯?」

涙が滲んできた。

「……これは夢なんでしょうか…？」

自分は死の間際に夢を見ているのだろうか？
だったら醒めないで欲しい…。

それとも、自分はもう死んでしまつていて、お父さんが迎えに来て
くれたのだろうか？

「大丈夫だ…。これは夢なんかじゃねえし……お前もまだ死んじゃ
いねえぞ悟飯！」

悟空は倒れている悟飯を抱きかかると、少し離れた所に寝そべら
せた。

「少し待つてろ悟飯。ブロリーはオラに任せとけ…お前はゆつくりと
休んでいるんだ…」

これが死の間際に見る夢でも幻覚でもいい。
もう一度、父が自分の前でその笑顔を向けてくれていてる事がとてつ
もなく嬉しかった。

「…………カカロットオオオオオオオオオオオオオオ…！」

超サイヤ人……いや、ブロリーは悟空の名を叫ぶと、筋骨隆々の姿
に変貌した。

伝説の超サイヤ人、ブロリー。

悟空と同じ日に相前後して生まれ、隣り合わせのベッドに寝かされ
たサイヤ人。

当時、生まれたばかりの赤子ながら戦闘力10000だつたブロリーは、隣に寝ていた戦闘力たつた2の力カロットに泣かされてしまった。

その屈辱がトラウマになり、ブロリーは悟空への憎しみを募らせた。悟空達が怒りによつて超サイヤ人に覚醒したのに対し、ブロリーは悲しみによつて超サイヤ人に覚醒した。

故に、悟空達とは系統が違う進化をした超サイヤ人なのだ。正史において、未来から来たトランクスが変身した超サイヤ人第三形態のように、筋肉が肥大化しているにも関わらず、肉体に掛かる負担も無く、スピードも落ちないという規格外。

二段階目の変身にも関わらず、超サイヤ人3をも凌駕する戦闘力を誇っていた。

「……昔のオラだったら、一人じやお前には勝てなかつた……。だが、今は違うぞ！」

悟空の氣が爆発し、閃光が広がつた。

閃光が晴れ、ブロリーと悟飯が目にしたのは、これまでの超サイヤ人とは異なる黒い長髪、目の周りが赤く縁取られ、首から上と胸部以外が赤い体毛に覆われた姿となつた。

「……な……なんだそれは！？」

流石のブロリーも動搖していた。

サイヤ人最強の筈の自分に匹敵……いや、もしかすれば凌駕するかもしれないパワーを感じたからだ。

「……俺は超サイヤ人4、孫悟空だ！」

超サイヤ人4。

大猿状態の強力なパワーと、大猿には無い超スピードを併せ持ち、性格が冷徹かつ好戦的になり、また、従来の超サイヤ人、特に超サイヤ人3の欠点でもあつた激しいエネルギー消費による肉体への負担とそれに伴う変身時間の減少といった問題は超サイヤ人4への覚醒によつて解消された、まさしく超サイヤ人の最終形態である最強の戦士。

「行くぞブロリー！」

「カカロツトオオオオオオオオ！」

超サイヤ人4対伝説の超サイヤ人の戦いが始まつた。

悟飯は、再び仙豆を食べて回復していた。
目の前で行われている超バトルスバが夢ではないことを悟り、そして圧倒されていた。

人造人間を苦も無く倒し、そして自分がまつたく歯が立たなかつた
ブロリー相手に、悟空は互角以上に渡り合つてゐるようだ。

今の悟飯では、目の前の超バトルを視認することさえ、至難の業だつた。

「……………お父ちゃん強いー。」

元々悟飯は純血のサイヤ人である悟空やベジータと違い、戦いを好みない性格をしていた。

今でも決して戦いか好きどしひわけてはなし
しかし父が亡くなり、師や仲間達が次々と人造人間達に殺された時
に感じた怒りと無力感が、戦う事に対する躊躇いを消し去った。

そして、平和を護れる強さを求める様になつた。

今、悟空から発せられる凄まじい気に羨望を感じていた。

「……敵わないなあ……」

父に憧れ、父のようになりたくて父の着ていたモノをアレンジした道着を着る様になつた。

でも、やはり格好だけ真似ても強さまでは真似は出来なかつた。

最も、目の前の悟空は違うタイプの道着を着ていたが……。

目指す背中は、限りなく遠かつた。

それでも、悟空の強さは悟飯ちちにとつて誇りだつた。

「やつぱり、いつかお父さんの様に強くなりたい……。大切な皆を護れるくらい強く……」

悟空の様に強くなる。

悟飯は再度、心に誓つた。

悟空とブロリーの戦いは半日続いていた。

最初の頃は悟空が優勢だったが、徐々にブロリーが強さを増していつたのだ。

やはり伝説の超サイヤ人は伊達ではなかつた。

父・パラガスが指摘した様に、ブロリーはサイヤ人そのモノなのだ。

戦闘民族サイヤ人。

戦えば戦うほど強くなる。

ブロリーは戦いの中で強さを高め、今や超サイヤ人4に迫るまでになつていた。

「……相変わらずの化け物つぶりだな…ブロリー…」

悟空は戦慄し、そして残念に思った。

ブロリーが全てを破壊する悪魔ではなく、いい奴だったら…ずっとこのまま戦い続けたかったのに……。

「……ブロリー…お前もウーブみたいにいい奴になつて生まれ変わつて来い。そしたら今度は、心行くまで戦つてみてえな…」

悟空は、魔人ブウの生まれ変わりである自分の弟子を思い浮かべた。

「ブロリー…これで最後だ…10倍かめはめ波を受けてみろー」

悟空は決着をつけるべく、かめはめ波の体勢をとった。

「かあー…」

「めえー…」

腰付近に両手を持つていぐ。

両手首を合わせて手を開いて、体の前方に構える。

「はあー…」

体内の氣を集中させ。

「めえー…」

溜めにより氣が掌に満ち。

「波あ~~~~~！」

両手からブロリーに向かつて撃ち放つた。

従来のモノとは比較にならない威力のかめはめ波がブロリーに迫る。

「カカロツトオオオオオオ！…」

それに対しブロリーは、左手に気を溜め、相手に向かつて放ち、衝突すると大きく膨張するギカンティック・ミーティアで対抗した。10倍かめはめ波とギカンティック・ミーティアはぶつかり合い、空中で燐っていた。

驚くべきことに既にブロリーの強さは、超サイヤ人4の悟空と互角にまで達していたのだ。

かめはめ波とギカンティック・ミーティアのぶつかり合いから発せられた凄まじい衝撃が、辺り一面を吹き飛ばしていた。

悟飯も吹っ飛ばされないように地に付けた足を踏ん張り、必死に留まっていた。

「……このままだとブロリーは、超17号や一星龍くらいまで強くなっちゃうな…。そうなつたら…この世界は終わりだ…」

今、悟空とブロリーが戦っているこの世界は無人世界だが、資源が豊富なので他の世界から次元航行艦がよく立ち寄り、資源を採掘していくらしい。

ブロリーが次元航行艦を乗つ取り、他の次元世界に移動したら……。今、この場でブロリーを倒して置かなくてはならなかつた。

「スーパーかいおうけん
……超界王拳！」

悟空は超サイヤ人4の状態で界王拳を使い、10倍かめはめ波の威力を更に引き上げた。

威力が増した10倍かめはめ波はギカンティック・ミーティアを霧散させ、そのままブロリーに直撃した。

「力…カカロツトオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ…！」

10倍かめはめ波を浴びたブロリーは、塵一つ残さず消滅した。

「……終わった…」

悟空は感慨深げに呟いた。

今まで悟空は、自分一人の力でブロリーを倒した事がなかつた。一番最初に戦つた時は、ピッコロ、悟飯、トランクス、ベジータからパワーを貰う事で、ブロリーを倒すことが出来た。

地獄で暴れているブロリーと戦つた時も、西の銀河最強の戦士であるパイクーハンの手助けが無ければ、倒せなかつた。

そして、今回…ようやく自分の力のみでブロリーを倒したのだ。そんな感慨に耽っている悟空に、悟飯が近付いてきた。

「……お父さん…」

「……大丈夫か悟飯」

死んだはずの父が何故、ここに居るのか。
そんなことはどうでも良かつた。

「…お父さん…お父さん…！」

悟飯は泣きながら悟空の胸に飛び込み抱きついた。

悟空は、約一年ぶりの父のぬくもりを感じながら泣きしきる悟飯を抱きとめ、その頭を撫でていた。

「…………そつだつたんですか……」

泣き止んだ悟飯は、悟空から説明を受けていた。

今、田の前に居る悟空は自分のいた次元とは違う次元の悟空である」と。

そして、悟空の世界がどの様な歴史を辿ったのかを……。

「…………でも、お父さんのが心臓病で死なずにいてくれた世界があつて嬉しいです……」

正確には、心臓病で死ななくても結局悟空は死んでしまうが、その7年後に老界王神の命を貰つて生き返るのだが……。

そして自分が幼い頃からの夢だった学者になれた世界が存在している事を知り、なんとなく嬉しくなったのだ。

今の悟飯は、既に学者になるという夢を抱いていない。

今の悟飯の夢は、悟空の様に強くなることなのだから……。

学者になるという夢を捨てた事に後悔はない。

そして、違う世界で自分が夢を叶えた事で、完全に未練が無くなつたのだ。

「…………それにしても……ドラゴンボールにそんな性質があつたなんて……」

願いを叶える事に発生するマイナスエネルギー。

それを浄化するには100年必要であり、ドラゴンボールを乱用す

るとマイナスエネルギーが爆発し、邪悪龍といつ宇宙を破壊する存在が生まれる。

そして、中には超サイヤ人4の悟空すら凌駕する強さを持っている者もいるという。

ピッ「口が死んで、神様もいなくなり、悟飯の世界のドラゴンボールは無くなってしまった。

ドラゴンボールがあれば……と、何度もそう思つた。
しかし、ドラゴンボールにそんな性質があるなら、みだりに使うことなんて出来ない……。

やはり自然の摂理を歪めるドラゴンボールは、老界王神がいつ様にまじめなナメック星人以外、使用してはいけないのだろう。

「……ところで…俺は元の世界に戻れるんでしょうか?」

「……」

悟飯の咳きと共に、悟空の表情が曇つた。

「残念だが……それは不可能に近い……

「エッ…この声は……神龍!？」

辺りに神龍の声が響き渡り、説明を始めた。

そもそも悟飯と悟空達は同一世界の時間軸が違う存在。如何に神龍といえど、作り主である神：つまりデンデの力を超える事は出来ないので並行世界に干渉は出来ないのだ。

悟飯とブロリーは天文学的な確率で、悟空と神龍が眠つていた『超越空間』を通過して異世界に跳ばされた。
異世界という元の世界と繋がりが無い世界だから、悟空達は悟飯とブロリーに接觸できたのだ。

並行世界の時間軸の元の世界に戻すことは出来ないのだ。

悟飯も何となく理解していた。

伊達に学者志望だった訳ではない。

「……正直、元の世界に戻れないのは辛いです。……でも……あの世界の地球も人造人間の脅威から解放されたんだ……だったら無理に戻る必要もないですね……」

自分の手で救つたわけではないが、それでも、もう人々が人造人間に怯えながら生活しなくても済む。
それは確かに喜ばしい事である。

本人にそのつもりはまったく無いが、結果的にブロリーは地球人の恩人となつた事だろう。

何処かの世界で言つ『反英雄』として、英靈の座に至れるかも知れない……。

メタ発言はほじほじにな……

神龍が突っ込みを入れた。

「なあ、神龍…なんとかなんねえのか?」

済まぬが私の力でもどうにもならない……出来たとしても途轍もないマイナスエネルギーが発生し、邪悪龍が生まれてしまうぞ……それに悟空、そろそろ限界が来ている。唯でさえブロリーとの戦いが思つた以上に長引いてしまつた。これ以上お前を現界させるのも、苦しくなつて來ている……

「じゃあ、このまま悟飯をここに置き去りにするつて言つのか?」

そうではない。私に出来るのはせいぜい近くの有人世界に送るくらいしか出来んと言つていいのだ……

悟空も分かっている。

それが自分の我儘だということを……。

「お父さん……いいんですよ……。元々、プロリートとの戦いで死を覚悟したんです。もう俺の世界において人造人間の脅威は無くなりました。この次元世界を危機に晒してまで元の世界に戻る必要もありません……。それに、一人の生活にはもう慣れましたし……」

人造人間を倒すために家を飛び出して以来、悟飯は一人で修行しながら、野生生活をしていたのだ。

「異世界に跳ばされた事で、もう一度……たとえ別次元の存在とはいえ、お父さんに逢えたんです……。俺は、それだけで……夢の様に幸せです……」

「……悟飯……すまねえ……悟飯！」

悟空は、また悟飯を強く抱きしめた。

こうして悟飯は、近くの世界に送られた。
その世界の山岳地帯に居を構える事にした。

悟飯の手に一冊の書物があった。

これは、悟空の全ての技の習得方法や、今まで悟空が受けた修行の内容などが記載されていた。

悟空が、せめてもの餞別として、神龍に頼み作つてもらつたのだ。
(悟空には自分の修行方法を書き留める様な学は無いので神龍に作つてもらつた)

とりあえず、これから悟飯がする修行は、超サイヤ人に慣れる事であつた。

超サイヤ人に変身すると落ち着きが無くなり、凶暴性が増し、軽い興奮状態になる。

その為、超サイヤ人になると体に大きな負担が掛かるので、日常で常に超サイヤ人に慣らす事によつて、超サイヤ人になつたときの落ち着きの無さを消す事で、戦闘力を上げても体に掛かる負担を克服するのが目的である。

これは、別れ際の悟空に口頭で最初に薦められた修行である。体への負担が減る事により、超サイヤ人の力をフルに使うことができる。

本来超サイヤ人は、力をフルに使いこなせれば、17号や18号よりも強い。

しかし、体に掛かる負担が体力を奪つていくので超サイヤ人の実力を完全に發揮できなかつたのが、ベジータや悟飯が人造人間達に敗北した理由なのだ。

日常で超サイヤ人でいるには、街に出るより、人が来ない山岳地帯に居る方が修行がしやすいのが理由だ。勿論、山育ちなので、知り合いが誰一人も居ない世界での都會暮らしなどが性に合わないという理由もあるが……。

それ以外にも、神龍はマイナスエネルギーが余り発生しない程度で様々なモノを悟飯に与えた。

元の世界に戻してやれない事へのせめてもの贖罪であつた。
こうして、悟飯の異世界での生活が始まった。

第四の未来は、孫悟飯が異世界に跳ばされる世界。

そして物語は、これより一年後から始まる

後編（後書き）

これで、序章は終了です。

後日、設定と本編の予告を執筆します。

設定に関しては、私の独自設定が混じっていますので、それに関する苦情は受け付けませんのであしからず……。

本編は予定通り、「時空を越えた黄金の闘士」完結後に執筆します。では、これからも私の作品にお付き合ってください。

設定紹介&本編のあらすじ

「愛読、ありがとうございます。」

それでは、この物語の設定を説明させていただきます。

なのはとドラゴンボールのクロスオーバーは数多く存在します。それらを拝読している時、自分だったらこういう風にする……という風に早い段階で構想を練つていました。

しかし、黒衣の魔導剣士や时空を越えた黄金の騎士など、既に執筆中の作品が多くありますので、これ以上増やすと頭がパンクしてしまうかもしれませんし、しかし、書きたい…そう思い、前日談である序章をUPさせてもらいました。

とりあえず、物語はStrikerSの空港火災より少し前から始まります。

ヒロイン候補は、スバルとティアナを考えております。

主人公の候補は、未来悟飯と未来トランクスのどちらかにしようか迷いました。

悩んだ末に悟飯の方に決定しました。

しかし、やはり未来トランクスも好きなので、準主人公として登場させるかも知れません。

ドラゴンボール側のキャラは、悟飯とトランクスの他に数人登場させる予定です。

その内の一人は、オリキャラで既に構想を練っています。
最も、完全なオリキャラではありません。

それでは、そのオリキャラの触り程度の説明を……。

基本的に悪人ではありません。

しかし、管理局とは相容れないわゆる『ダークヒーロー』的なキャラを予定しております。

悟飯とは、共闘したり敵対したりするいわゆる『好敵手』キャラといえるでしょう。

このキャラは割りと最初の方に登場させる予定です。

ドラゴンボールといえば武道家ですので、ViViDのネタも加えるつもりです。

それでは序章の設定について。

18号が持っていた宝石は『ジュエルシード』です。

『無印編』で、プレシアと共に虚数空間に墮ちたモノの一つです。虚数空間と次元を越えて、ドラゴンワールドに墮ちて来たモノを18号が拾いました。

発動しなかったのは、18号が特にジュエルシードに願うような強い願いを持つていなかつたからです。

破壊と殺戮を楽しんでいる人造人間には、心に強く思つよくな願いがあるとは思えませんので……。

これが、正史の18号なら強い願いを抱くかもしれませんけど。

そして、悟空に強い執着を持つブロリーに踏み碎かれ、魔力が溢れたときブロリーの願望に反応し、次元震を起こり悟飯とブロリーを超越空間に跳ばした。

という設定です。

悟空達とブロリーは別系統の超サイヤ人です。

ゲームでは、原作では3にならなかつたベシータや未来トランクス等を超サイヤ人3にしています。

まあ、それはいいでしょ。

しかし、別系統のブロリーを3にしたのは私自身はあまり納得出来ませんでした。

なので、この話のブロリーを3、ましてや4にはしませんでした。ブロリーの最終形態は劇場版の筋骨隆々の姿です。

では、次に悟空達の系列の超サイヤ人について。

超サイヤ人（第1形態）、超サイヤ人第2形態、超サイヤ人第3形態、超サイヤ人フルパワー、超サイヤ人2、超サイヤ人3まではほぼ原作どおりの設定です。

超サイヤ人4に関しては、公式では解りませんがこの物語独自の設定として、変身できるのは純血のサイヤ人のみということにしていきます。

アルティメット悟飯については、老界王神がないので未来悟飯は当然なれません。

しかし、まだ詳しいことは明かせませんが、悟飯も超サイヤ人4級の強さになれるプランを考えています。

それでは、簡単に本編のあらすじを持つて終わらせていただきます。

神龍にミッドチルダという世界に跳ばされた悟飯は、悟空に言われた様に超サイヤ人の感情の高ぶりを消した超サイヤ人フルパワー状態に至る為に、常時超サイヤ人になり、体を慣らしながら修行していました。

約一年程過ぎ、超サイヤ人フルパワーに至った悟飯は、現地人と接觸した。

時空管理局の陸士108部隊の部隊長ゲンヤ・ナカジマ三佐が部隊

の者と武装局員を引き連れてきたのだ。

彼らは、密輸ルートの捜査の結果、犯罪組織のアジトがこの山岳地帯を越えた先にある事を付きとめ、武装隊を引き連れて、アジトに向かおうとする途中に悟飯を見つけたのだ。

話を聞き、悟飯が次元漂流者である事を知ったナカジマ三佐は、悟飯を保護することにした。

悟飯も現地人との争いを望んでいたので、しばらく言つとおりにすることにした。

そして、密輸組織のアジトに向かつた108部隊が見たものは……無残に殺された組織の者たちの死体だった。

では、これからも私の作品にお付き合いくふ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4364x/>

時空を越えた超戦士～序章～

2011年10月31日07時55分発行